ABIC 国際社会貢献センター
Information Letter

No. 65　2022年12月

外国企業支援
バングラデシュ企業との商談会通訳を終えて …… 2

自治体・中小企業支援
高知県の中堅企業へのHRM支援 …… 3

教　育
教えと学び —気付きと刺激の好連鎖— …… 4
大学の実務家教員になって …… 5
高校生国際交流の集い2022 …… 6

留学生支援
目指せ！「紙切り」名人 …… 7
大切な居場所 …… 8
東京国際交流館での活動 …… 9
兵庫国際交流会館での活動 …… 10

その他
全国中学生作文コンテスト東京都大会の一次審査を担当 …… 11
東京都つながり創生財団について …… 11

会員の種類 …… 12
法人・個人正会員／賛助会員一覧、活動会員数 …… 12
賛助会員入会のお願い …… 12

特定非営利活動法人 国際社会貢献センター (ABIC)　www.abic.or.jp
Action for a Better International Community

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3–2–1
霞が関コモンゲート西館20階
Tel : 03-6268-8604　Fax : 03-6268-8652
e-mail : mail@abic.or.jp

（関西デスク）〒541-0053　大阪市中央区本町4-4-24
住友生命本町第2ビル9階
Tel : 06-6226-7955
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp

本誌の著作権は発行者に帰属し、無断転載・転送することを禁止します。

外国企業支援

バングラデシュ企業との商談会通訳を終えて

UNIDO東京投資・技術移転促進事務所（UNIDO東京事務所）は、国際連合工業開発機関と日本政府との協定に基づき、主に開発途上国･新興国の経済発展を支援するために設置された機関である。このたび、バングラデシュ有力企業ミッション（建設、エンジニアリング、化学、アパレル、物流、保険等）の訪日機会に主催者UNIDO東京事務所より3年ぶりに対面での商談会を実施するに当たり、通訳者派遣の要請を受けた。

今回は、本国より投資開発庁の幹部も来日し、同国のビジネス事情につき講演も行われた。大阪（日野武彦、奥中賢次、松井洋子）、東京（山根昭郎、宮越勉、朝倉一美）の6人の会員が、商談会通訳で活躍いただいたのでその所感を紹介する。（敬称略）

（外国企業支援グループ）

1．9月26日（月）大阪会場

日野（ひの）　武彦（たけひこ）（元 伊藤忠テクスマック）

バングラデシュ企業は10社、日本企業は30数社が参加し、多業種・多分野にわたり活発な商談が行われた。

私は繊維・アパレルが専門であり、3件ほど通訳を通じ商談のお手伝いをした。商談時に気を付けた点は、正確に通訳することはもちろんのこと、今後商売を進めるに当たり前もってクリアにすべき点、気を付けるべき点の助言を求められた際に、これまでの経験に基づいて親身になって対応することであった。

当初バングラデシュ企業の参加は14社と聞いていたが、最終的に10社になりコロナ禍での来日の難しさを感じた。逆にこの厳しい状況下来日した企業は、日本とのビジネスの取り組みに関して真剣さを感じた。またUNIDO東京事務所もコロナ禍での受け入れで非常に苦労されたと思うと同時に、それらが報われるような有意義な商談会が開催できたことは、日本とバングラデシュ双方にとってビジネスチャンスを広げるためにはとても良い機会であったと思う。

ここ2年ほどはコロナ禍でほとんどの商談がオンラインにシフトされたが、今回久しぶりの対面形式の商談会となった。対面形式は相手の反応を見ながら商談を進めることができ、昔の懐かしい記憶もよみがえってきた。オンラインでも商談は可能だが、やはりFace to Faceのライブ感にはかなわないと実感した。

大阪会場

2．9月29日（木）東京会場

山根（やまね）　昭郎（あきお）（元 住友商事）

東京でも3人が通訳として参加したが、通訳としての出番は各人とも限定された。東京ではほとんどの日本企業、参加者が通訳を必要とせず、事前に必要と回答されていても当日になって不要とされたところもあったとのこと。日本企業や参加者が相手方とダイレクトにコミュニケーションを取りたいとの姿勢や意欲の表れであり、これからの両国の結びつきを深めるためには大変好ましいことではある。しかし、頑張って準備していただけに、今少し出番があり、通訳として役立ちたかったというのが率直な感想である。というのは、通訳者を介することで、より双方の理解と意思疎通が深まり、具体的な商談への可能性が高まると考えるからである。

私が担当したのは大変意欲的な案件であった。それは、日本企業が自社の技術をバングラデシュの製造会社に提供するとともに、副資材の一部を日本から供給することによって、現状では二酸化炭素が大量に発生し、法規制がかかる見込みの原料を当面使用せざるを得ないという問題を抜本的に改善し、SDGsにも大いに貢献することが見込まれるプロジェクトであった。実際に通訳をしていて、自分がその案件に関わっているかのような躍動感をさえ感じた。今回このような機会を頂いたことに感謝するとともに、UNIDOの関係者ならびにバングラデシュの皆さまのますますのご活躍を祈りたい。

東京会場

自治体・中小企業支援

高知県の中堅企業へのHRM支援

葛目（くずめ） 薫（かおる）（元 丸紅）

私の最初のABICを通じての支援活動は、企業支援ではなく教育であった。

2020年5月に突然ABIC事務局（大学等講座グループ）より、ABICが受託している関西学院大学のリレー講座「現代の総合商社」の人事パート1コマを引き受けてもらえないかとの依頼があった。

現役時代に人事関連業務に30年弱携わっていたが、その時点で人事部を離れて既に7年が過ぎており、躊躇（ちゅうちょ）はしたものの、自分の経験・キャリアで少しでも世の中への恩返しができればとお引き受けしたのを記憶している。（当該講座は現在も継続中）

翌2021年3月ごろ、事務局（自治体・中小企業支援グループ）より「高知県移住促進・人材確保センターの依頼に基づき、同県の中堅企業より人事制度構築サポートのニーズがあるが、関心はあるか」との問い合わせを頂いた。

高知県は人口が68万人強と江戸川区1区と同程度の規模しかなく、県内企業の従業員規模でも中小～中堅レベルがほとんどであることから、私の現役時代の経験・知識が果たして役立つかどうか、不安はあったものの、現実に困っている企業がある以上、自分にできることがあればチャレンジしてみようと思い、支援をお引き受けすることとした。

最初にお引き受けした企業は、100人弱の電機・太陽光事業の中小企業であり、人事評価制度の構築が主たるミッションであったが、その後、高知県移住促進・人材確保センター経由の口コミによるお声掛かりも増え、現在では、食品の6次産業（生産・製造・販売）企業、健康情報事業企業、エネルギー（石油・ガス）事業企業3社の人事関連業務を中心とした顧問を務めている。

3社はいずれも、100－300人規模の中堅企業であり、支援内容は「能力主義に基づく報酬・資格・評価制度の構築支援」「企業理念・ビジョン・ミッション・バリュー・クレドの制定、定着支援」「人事部門の経営支援機能強化」および、それに付随するコンサルティング業務等である。

支援企業での会議の様子（右が筆者）

もちろん、私の出身企業の人事制度の内容・コンセプトをそのまま適用することは、不可能というよりむしろマイナス面の方が大きいが、組織の規模が異なっても「どうしたら社員のMotivationが上がり、社内が活性化するか」「経営のメッセージはどうしたら社員に伝わるか」「社内の求心力、社員の帰属感はどうすれば高まるか」等、全ての人事制度構築の根幹のフィロソフィー部分は共通であり、そのための効果的なアプローチ・手法には相通じるものがある。

一般に、地方の新興中堅企業は、効率性の観点からも設立当初は人事面も含め、経営全般を社長がマネージし、会社を回しているが、業容の拡大に伴って社員数が100人を超える規模になると、個人商店的な人事管理では会社が回らなくなり、経営管理としての人事制度構築の必要性を意識するようになる。

ところが、人事担当部署を設置しても、ほとんどの企業では、勤怠管理を中心とした労務管理、給与・税務・社会保険等の人事実務中心の人事管理（Personnel Management）に留まり、人材育成・社内活性化・経営補佐（提案）等、経営が人事部署に期待する機能にはなかなか手を付けるには至っていないのが実情である。

それらの課題に対し、いざ取り組みを開始しようとしても、「どうしたら良いか？　どこから手を付けたらよいか？」「どういうゴール設定を考えたらよいか？」「そもそも担当できる人材がいない」といった状況からなかなかスタートを切ることもできず、その中で「社内のコミュニケーションがうまく機能しない」「優秀な若手人材の採用が思うようにいかない」「組織を任せられるミドルマネジメントの育成が進まない」といった経営課題が共通して徐々に顕在化してきているように思われる。

人事戦略は経営戦略と「車の両輪」であることから、経営的視点から人事制度の構築を考え、人材を経営資源と捉えた「HRM（Human Resource Management）」の観点からのアドバイスを行うよう心掛けている。

私のこれまでに培った経験・ノウハウ・知識が、かかる課題の解決に少しでも役立ち、企業のさらなる発展に寄与できるようであれば望外の幸せである。第二の人生において、こういった機会を与えてくれたABICの活動に改めて感謝したい。

教　育

教えと学び —気付きと刺激の好連鎖—

中湊（なかみなと）　晃（あきら）（元 三井物産）

私とABICとの出会いは2015年秋にさかのぼる。ABICの大学講座担当コーディネーターであった三井物産OBの大先輩から、三井物産出身の講師が少ないのでやらないかと声を掛けていただいた。当時はまだ現役であったが、会社で経営環境分析の仕事をしていたことからお役に立てればと引き受けた。以来ABICにはさまざまな講師の機会を頂き大変感謝している。その経験を幾つかご紹介したい。

一つ目は、青山学院大学の「国際ビジネス」で今学期も教壇に立っている。2004年から続く歴史のあるABIC提供講座であり、全学部の2－4年生を対象とする。「国際ビジネスと海外事情」は青山キャンパスでの英語による講義、「国際ビジネス入門」は相模原キャンパスの日本語講義と違いはあるが、複数のABIC講師が得意な地域、産業を分担し講義する形式は共通で、私はビジネス環境の全体俯瞰（ふかん）とエネルギーを担当している。全体俯瞰では、「ビジネスとはビジネス環境に対する産業的解決策」であることをメッセージとして、ウイズコロナ、米中対立、脱炭素、高齢化、DXなど国際ビジネスが直面するビジネス環境を取り上げて説明、各論に入る前の学生の頭の整理を試みている。また43年にわたる商社マンとしての自己体験をサンプルに、冷戦終了、リーマンショックなど自身が直面したビジネス環境変化と、その際に取り組んだビジネスを紹介し、ビジネスとビジネス環境の関係性をより具体的に説いている。毎回学生からリアクションペーパーが任意で提出されるが、的を射たコメントと真剣な質問は授業を進める上でとても良い材料となっている。

二つ目は、青山学院大学 地球社会共生学部で2018年度に担当した「アジア経済入門」である。担当教授のピンチヒッターとして15回の講義を引き受け、シラバス作成に始まり、課題レポートの採点、単位の授与といった一連の教職を経験した。

講義の様子

オンライン授業のビデオ収録

受講の学生は東南アジアへの留学を翌年に控え、大変熱意があった。実務家教員としてこれに応えるべく、直前にインドネシアに駐在していた自らの土地勘、ビジネス勘と、現場にいるアジア店長の協力も得てビジネス目線での最新のアジアの姿を伝えた。約100人の学生を10グループに分け、それぞれアジアの10ヵ国を担当させ、国の強み、弱み、そこで行いたいビジネスを発表させ、さらにどの国の成長性が高いかを互いに議論させた。ちなみに学生はベトナムを選んだ。コロナ禍の前であり、対面でさまざまなアクティブ・ラーニングを実践できたことは良い思い出である。

三つ目は、2021年度の東洋英和女学院大学大学院においての「ビジネス—企業と国際協力」である。5人の同僚と分担する講座であるが、実社会を知る学習意欲の高い少人数の社会人学生を対象とするクラスで、密度の濃い双方向の授業ができた。特にSDGs時代における総合商社の役割について、教壇で得た自らの学びも大きく、来年（2023年）度の授業での議論が今から待ち遠しい。

これらの経験を通じて、ABIC講座は講師と学生にとりウィンウィンだということを改めて感じる。大学からは国際社会での現場経験を持つ実務家教員への期待が大きい。理論だけでなく、一人一人が実践してきた国際ビジネスの経験と、商社が今の国際社会にどのような価値を提供し、未来に挑戦しているのかの実例は、国際ビジネスに興味を持つ学生に気付きと刺激を与える。また講師は、学生に向き合い真剣に教え、率直な反応を得ることで、一人で学ぶよりはるかに多くの気付きと刺激を受け、学びを深めることができる。ABIC会員の皆さんには、気負うことなく教壇に立つことをお勧めしたい。

教　育

大学の実務家教員になって

中西（なかにし）　功（いさお）（元 豊田通商）

豊田通商で30年間勤務し、役職定年を機会に2016年に早期退職し、中小企業診断士として独立した。退職に際して、人事部よりの勧めもありABICに登録したところ、直後に企業研修のお話を頂いた。独立後間もない仕事等のない時期に大変ありがたかった。

その後、いくつかの企業と顧問契約を結び2018年に法人化し、なんとか安定してきたところで、ABICより大学の非常勤講師のお話を頂いた。驚いたことに、担当するのは理工学部ということで、数学や物理が大の苦手の私は不安を覚えたが、大学の方から「専門に凝り固まった理工学部の学生の視野を広げるような授業をしてほしい」ということで「国際理解概論」という科目のテーマを頂いた。当該科目については、同大学で経済学部の学部長をされている方が商社出身というご縁で、ABICに話があったと聞いている。初めての経験であるが何とかシラバスを書き上げると、ABICからのご紹介ということもあり、無事採用となった。

「国際理解概論」では、全15回のうち、初めの半分を中国・米国・欧州・日本の4極を、PEST（政治・経済・社会・技術）の切り口で分析することに充て、後の半分はグローバル化を進める企業の研究と、グローバル化の下での働き方について、私自身の経験を踏まえてお話しし、学生に考えてもらうという構成である。最終的には世界情勢と企業活動を知り、自分としてこれから何を学び、どんなキャリアを目指すかを修了論文にするという講義を実施している。

2019年9月より非常勤講師としてスタートし、2022年で4年目を迎えるに至った。初年度は50人程度の学生を相手に、以前通っていたビジネススクールでの授業の進め方を参考に、グループワークを取り入れた講義を行った。学生からはまずまずの反応を得ることができたと、少し安心していたところでコロナ禍が始まった。2年目の2020年はコロナ蔓延中の最も不安な時期で、グループワークはおろか、対面授業もできない場合もあり、不慣れな機器を使いながら、画面に向かってしゃべるというオンライン授業も経験した。企業の仕事で限られたメンバーでのオンライン会議にはすぐ慣れたが、一対多の一方通行のオンライン授業は難しかった。オンライン授業の場合は、学生は顔出しせず、また人数が多いので反応をつかむことは難しく、試行錯誤の毎日であった。そのうち少し慣れてきて、オンラインシステムのチャット機能を使いながら、限定的ではあるが双方向での授業もできるようになったが、対面のライブの良さというものを再認識した。2022年は、全面対面授業で始まり、受講者が100人を超え盛況となり、こちらもやる気満々で取り組んでいる。やはりライブで、大勢のお客さん（学生）が入ると、余計にやりがいを感じる。このような経験は、なかなかサラリーマンでは味わうことのできない貴重な経験である。

大学の外観

オンライン授業の合間に

また学生と議論することで自分の視野も広がり、また講義の準備をすることで学び直しにもなり、企業でのアドバイザーの仕事にも役に立っている。そして学生から、「ニュース番組を見るようになりました」「企業の戦略や業績に関心を持てるようになりました」「就職先を考えるのに役に立ちました」といった何らかの成長に関わるメッセージを直接もらうことは、今までのキャリアでは得られなかった喜びであり充実感を感じている。

最近は教育機関でも、アカデミックキャリアを持たない実務家教員の採用を増やしているといわれているが、その一方で希望者も多くなかなか大学の非常勤講師になることは難しいようだ。そのような中で、素晴らしい機会を与えていただいたABICに感謝申し上げたい。

教　育

高校生国際交流の集い2022

関西デスクコーディネーター　橘（たちばな）　弘志（ひろし）（元 三井物産）

今回で16回目となる関西学院大学とABICが共催する「高校生国際交流の集い2022」は、新型コロナウイルス感染が収束を見せない中でも留学生が少し戻ってきつつある状況から、行事日程全体にわたる各場面で可能な限りの感染防止対策を講じながら1日目をオンライン、2日目を集合・対面形式で行うこととし、準備が進められた。これに基づき、関西学院大学の学生組織KGIH (Kwansei Gakuin Global Inspiration with High school) メンバーも、参加高等学校の募集、高等学校側の担当教諭との事前協議、留学生受け入れ団体への説明等、開催に向けての準備作業を行うとともに、オンラインと対面のハイブリッド開催に伴う行動シミュレーションを行った。

今回は共通スローガンを「Better Than Now ～自分の未来を自分の手で～」とし、参加高校生がこの行事を通じ、個々のコミュニケーション、言語スキルの向上を目指し、国際社会とのつながりを持つ機会を実感できるようにとの意味が込められた。参加校は、大阪府立箕面高等学校、兵庫県立国際高等学校、兵庫県立宝塚西高等学校、兵庫県立兵庫高等学校、神戸市立葺合高等学校、関西学院高等部、関西学院千里国際高等部、啓明学院高等学校、帝塚山学院高等学校の計9校で、計33人の高校生が参加した。併せて、12ヵ国から14人の留学生が1日目はオンラインで参加し、2日目はそのうち、米国、イタリア、インド、インドネシア、ベトナム、マレーシア、モンゴル、ラオス８ヵ国からの8人が対面で参加した。関西学院大学からは、KGIHの学生31人が本行事の推進役となった。

8月4日、関西学院大学研究推進社会連携機構社会連携センター長 野村教授による開会あいさつで行事がスタートし、KGIHによるオリエンテーション、次いで起業を実践した大阪大学の現役学生が社会貢献につながるカフェの経営について英語で基調講演を行った。午後から、参加者はレクリエーションプログラムを通じて親睦を深め、SDGsの目標に沿ったテーマについて9グループに分かれてオンラインによるディスカッションに入った。

2日目は関西学院大学西宮上ケ原キャンパス内の教室に場所を移し、KGIH学生の指導の下、各グループによるディスカッションが続けられた。各グループはおのおののテーマに基づく課題を解決するためのビジネスプランを作成した。プレゼンテーションは、3年ぶりの対面による発表会となるため、会場の座席間隔の確保、発表後の軽い飲食を伴う懇親会の断念などの対策が取られた。プレゼンテーションは各グループとも、全員で協力しつつ、定められた時間内で熱心に行われた。参加高等学校の教諭、ABIC宮本理事長、宮崎事務局長も今回は会場で審査、採点、評価に参画した。 閉会式では宮本理事長がスピーチの上、審査結果に基づき、上位3グループに表彰状を授与した。次に、関西学院大学社会連携センター長 野村教授が参加者全員に修了証を授与した。

今回は一部対面での開催となったが、関西学院大学研究推進社会連携機構のご尽力により円滑な運営が行われた。オンラインによる実施を余儀なくされた2年間を経て、一部対面での実施を決断された関係者の皆さまの英断に改めて感謝したい。2023年度以降は全日程が対面による実施となるよう願っている。

参加者全員で

宮本理事長（左端）による表彰状授与

留学生支援

目指せ！「紙切り」名人

山浦（やまうら） 信幸（のぶゆき）（元 国際協力機構）

1．ABIC日本語広場との出会い

私は5年前に退職するまでJICA（国際協力機構）で開発途上国との技術協力、後には資金協力にも従事した。ちなみに、最初の配属は研修事業部で、浜松町の貿易センタービルでの「貿易振興セミナー」を担当、また、2年間通商産業省（当時）の経済協力課に出向した際には南アジアの円借款を担当し、商社の方々に大変お世話になった。

在外勤務は20年弱、アジア４ヵ国、アフリカ３ヵ国（いずれも仏語圏）。同世代の皆さまと同様に私たちの世代では10代の頃は外国へ行くこと、ましてや滞在することは夢のまた夢であったので、とても得難い時間を過ごすことができた。

退職後、地域のコーラスに参加したが、そこで東京国際交流館の日本語広場（以後「広場」）で教えられていたABIC会員講師にお会いし、この活動を紹介していただいた。若い頃は学校の先生になりたいとも思っていたこと、退職直前まで在外勤務が長かったため退職後は日本に暮らす外国人に親近感を強く持っていたこともあり、早速ABICの日本語教師養成講座に申し込んだ。そして講座終了後2022年の4月から広場での講師経験を始めさせていただいたところである。

2．目指せ！「紙切り」名人、林家正楽

広場では来たいとき・時間のあるときいつ来てもいいので、教える側からすると今日は何人来るのか、誰が来るのか、その人はこれまで何を学んだのか、どれくらい理解しているのか、今日は何を学びたいのか等がその場にならないと分からない。つまりちょうど寄席でお客から「お題」をもらってその場ですぐに切り出す「紙切り」の名人にならなければならない。そのため、こちらとしては全くの初心者向けの最初のあいさつや1－10の数字から基礎的な文法、さらにひらがな・カタカナなど多岐にわたる課題の準備が必要になる。加えて参加者が複数いた場合、学習歴が異なれば山の分校の複式授業になる。おのおのに課題を決め別々に要点を説明し、練習をしてもらう。できれば参加者同士でロールプレーをして交流の機会もつくる。

日本語広場の授業風景

ニジェール地方の小学校建設現場（無償資金協力）

というわけで名人への道は遠くて険しいが、毎回授業が終わるとささやかな達成感と新たなアイデアも生まれるので、次の週を楽しみにしている。

3．開発途上国の豊かさと活気

広場の参加者は開発途上国の人が多い。日本で報道される開発途上国のニュースといえば、紛争、テロ、自然災害、病気、難民、貧困がらみのもの、あるいは十分に（過剰に）脚色・編集された旅番組が多い。確かに先進国にみられる多品種・大量生産・大量消費、広域流通といった経済面、あるいは教育・医療・社会福祉分野における政府の関与などとはだいぶ異なることが多い。しかし、どこの国であってもこれまで長い歴史の中で培われてきた経済制度、社会制度、伝統文化、セーフティネットがある。また各国間や地域間での経済的、社会的なつながりが重層的に発達している。例えば私の任地の一つにアフリカのニジェールがあった。サハラ砂漠の南縁の資源に乏しい国であるが、飢饉（ききん）のときの各部落内での相互扶助体制や周辺国に住むニジェール出身者とのつながりが出来上がっている。また、アフリカの伝統医学会の大会が開かれたこともある。

これまでの所与の条件も踏まえた各国の広場の参加者は、みな非常に優秀で活気にあふれ、これからの国の発展に大きく貢献し得る人材ばかりである。この広場でささやかではあるが未来のある彼らとの交流を楽しんでいきたい。

留学生支援

大切な居場所

時岡（ときおか） 深雪（みゆき）（元 ザ・パック）

私は、兵庫国際交流会館（HIH）でのABIC日本語広場の初級クラスで日本語を教えている。

今年（2022年）で7年目になる。初級クラスは、日本語を全く学んだことがないゼロ初級の学習者が多い。学習者は留学生や研究者、その家族、会社員などである。HIHに住んでいる学習者もいれば、会館外から通ってくる学習者もいる。

初級学習者は「あいうえお」から始まり、初級の文法を積み上げながら勉強している。初めは自己紹介をするのもやっとだが、少しずつ会話ができるようになると、日本語でコミュニケーションが取れるようになり、初級が終わる頃になると日本語で冗談を言える学習者も出てくる。

館内での共通語は英語だが、館外から通ってくる人たちに英語が通じるとは限らない。日本語で話ができるようになるとクラス全員の共通語は、日本語になる。ちょっと不思議で面白い。

週3回熱心にクラスに参加し、自主学習をし、日本で就職をした学習者もいる。そんな学習者たちに日本語を教えることは、教えるだけでなく新たに気付かされることも多く、自身を再発見でき楽しい。

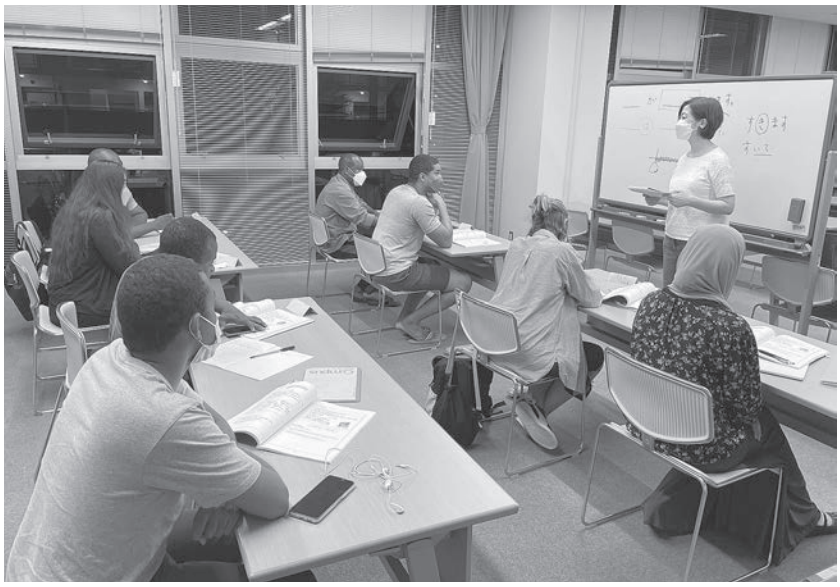
ABICとの関わりは、日本語ボランティアの仲間から声を掛けられたことから始まった。子どもたちの手が離れ、社会に復帰する前にリハビリをしようと始めたのが日本語ボランティアである。どんなことをしようかと思案している時に知人から、日本語を教えるボランティアがあることを聞き、とても興味を持った。その知人の紹介で実用日本語教育推進協会（THANK's）の日本語ボランティア養成講座を受講したのが、外国人に日本語を教えることの始まりだった。

THANK'sは、日本語教育の裾野の拡大と質の向上を目的とし、日本語ボランティアの育成、オリジナルテキストの作成、外国人への日本語教室を行っている。2021年、これらの活動を認めていただき第45回井植文化賞国際交流部門を受賞した。

THANK'sでは、一対一のレッスンが主体になっているので、学生とじっくり向き合い集中して勉強することができ、学習者も確実に成長している。そこで、複数集合型のABIC日本語広場受講者で、日本語をもっと勉強したい学習者は、THANK'sでも学習をしている。

そんなTHANK'sの仲間がABIC日本語広場の講師をしていた。彼女が声を掛けてくれたので、私もABIC日本語広場で日本語を教えることになった。また、私がABIC日本語広場の講師をしているご縁で、THANK'sが開催している日本語ボランティア養成講座をHIHで開催することができた。

ABIC日本語広場の初級には6人講師がいる。この中にはTHANK'sの仲間も数人いる。初級は、中・上級と違い学習内容を共有していくことが大切だ。各曜日での学習内容をLINEで共有し、お互い情報交換をしながらレッスンを進めている。レッスンの内容を共有することで、学習者が弱いところは担当曜日以外のレッスンでも復習をしながら進めることができる。



日本語広場での授業風景

また、情報共有をしているおかげで、コロナ禍で急に休むことがあっても休講することなくレッスンをすることができた。このようにお互い協力し合いながら、日本語を教えることができている。

ABICの日本語講師になり、外国人へ日本語を教えることだけでなく、新しい仲間も得ることができた。私にとってABIC日本語広場は、信頼できる仲間と人としても進化できる大切な居場所である。もちろん学習者にとっても、大切は居場所になっているだろう。

留学生支援

東京国際交流館での活動

ABICは、東京国際交流館（TIEC）において日本語広場、日本文化教室、春・秋のバザー、国際交流フェスティバルでの日本文化体験教室等、さらにはTIEC在館者の育児健康相談、入園、入学、各種健診等さまざまな支援を行っている。

日本語広場

コロナ感染拡大第6波のため1月から中断されていた対面式授業は、4月初旬から再開し、4−9月に398人、2022年1月から新たに始めた金曜日19時からのオンライン授業は234人（元TIEC在館者を含む）が日本語広場での活動に参加した。なお、8月前半の夏期集中コースはコロナ感染拡大第7波を考慮して見送られた。

コロナ前は家族帯同者の本人やその家族などが大勢参加していたが、コロナ禍によりそれらの人々の参加が大幅に減り単身者が主体になった。単身者は大学の授業があり、平日での参加が難しいケースが多く日本語広場への参加者数に変化をもたらした。

学生、研究者とも8月でおのおのの過程を修了するケースが多く、7−8月にかけて退館する一方、入館者は日本の入国基準が厳しいことから来日・入館時期が後ろ倒しとなり、7月、9月の日本語広場への参加者が半減した。

従来、金曜日は日本語広場は休みだが、1月から初級2の2クラス、中級の2クラス、計4クラスのオンライン授業を開設。いろいろな理由で午前中の参加が難しい学生のために19時から20時半までとし、さらにTIECを運営・管理する日本学生支援機構（JASSO）の了解を得て元TIEC在館者にも門戸を開いた。元TIEC在館者は日本で就職した人もいれば、帰国した人もおり、国際的なつながりを広げる場にもなっている。TIECを退館しても、なお日本語を勉強しようとの意欲を真摯（しんし）に受け止め対応することが必要。現役の学生にとっても日本語だけでなく、元TIEC在館者からいろいろな話が聞ける機会にもなっており、オンライン授業は有意義なものになっている。

新規入館者が増える10月初め、および10月下旬の2回に分けて日本語広場・日本文化教室のPRを目的に、今回初めて全TIEC在館者に一斉メールを管理センター経由で発信した。その効果があって、10月からの参加者がかなり増え、特に初級1、中級、上級コースの増加が目立っており、PRの大切さを改めて認識した。11月中にもさらに50人程度入館予定なので、再度一斉メールを出す予定。

日本文化教室

日本語広場と同様4月から活動再開。再開を待ち望んでいた人が多く、各クラスとも活況を呈した。夏休みの8月を除く4−9月で123人が参加。10月以後も参加者向けにPRをし、できるだけ多くの人が参加するように努める。

バザー

2022年度は5月と11月に開催。ABIC活動会員ならびに法人会員各社から多くの寄贈を頂戴し、いずれも盛況であった。寄贈をして下さった皆さまに対して心からのお礼とともに、今後とも引き続いてのご支援・ご協力を切にお願い申し上げます。

バザー開催日には日本語広場の講師がABICの活動を入館者に紹介し、日本語広場や日本文化教室への参加者増を図っている。

国際交流フェスティバル

通常は8月開催だが、2022年度は2023年2月25日に開催予定。ABICは書道、華道、空手の体験教室を開く。開催時期は2月とかなり先であり、コロナの感染状況の行方は不明だが、JASSOは状況次第で対面だけでなくオンラインも活用するハイブリッド方式を考えている。

なお、留学生支援グループの活動としては上記以外に「日本語教師養成講座」や「会員企業や大学への日本語講師派遣」も行っており、ご関心がありましたら、ABIC事務局へご連絡ください。

（留学生支援担当コーディネーター）

日本語広場

茶道教室

留学生支援

兵庫国際交流会館での活動

日本語広場

ABIC日本語広場は2015年5月から開始し、2018年度には年間受講者数延べ2,126人と過去最高を記録した。しかし、2020年度は新型コロナウイルス感染拡大で1,067人と半減し、2021年は1,562人とやや持ち直した。政府の緊急事態宣言が断続的に発出され、その都度対面からリモートでの授業を実施したが、2022年3月以降はこれが解除され対面授業に戻っている。2022年度上半期は、974人となり通年でも前年度を超える受講者数が見込まれる。

一方、オミクロン株第7波は8月がピークで現在は落ち着いており、一般の感染対策はかなり緩和されてはいる。しかし従来から兵庫国際交流会館（HIH）が実施している対策、①三密の回避　②マスクの着用　③教室は換気に留意し窓とドアを開放　④手洗い消毒の励行、等は事態の急変に備え現在も実行している。

コロナ禍で実施されてきた入国制限は2022年後半に解除になり、9−10月以降50余人の入館者があった。そのうちアフリカからの学生は20余人と一番多く、次いで中東、一方中国、韓国、台湾などからは以前に比べて少なかった。アフリカ、中東からの学生は、日本語はあまり話せず、初級クラスでの受講が一般的だったが、今回は少し異なり、すでに自国で日本語を習得し、いきなり上級、中級クラスで受講する学生も出てきている。特に上級は、従来は3−4人の受講生であったが、7−9人となり、定員6人の研修室3から大きな研修室1で開催している。彼らはHIH退館後は日本での就職を目指しており、講義内容も就職に役立つ内容、例えば、ビジネスメール、ビジネスマナー、敬語の使い方等になっている。この傾向は今後も継続するものと思われる。

日本文化教室

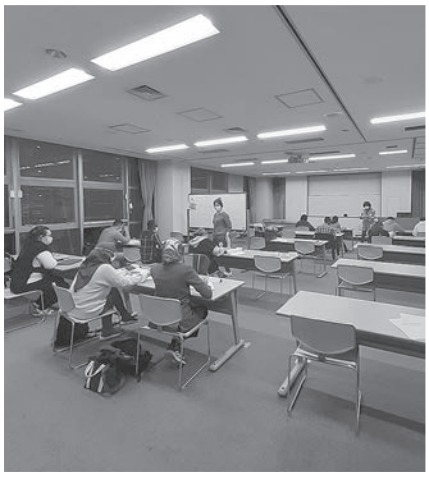
日本文化教室活動は、2021年度はオンライン授業が困難なことから時折休講を余儀なくされたが、2022年度は対面授業になりクラスに明るさが戻っている。最も人気のある華道は、修了証の取得に向け2021年度から熱心に参加する学生が多い。この度、来日前に中国の日本華道教室に通い准教授の資格を取得した学生が参加した。さらに上（家元教授）を目指したいとのこと。受講者は中国、台湾、韓国だけでなく米国、英国、フランス、モロッコ、ジブチ、カンボジア等の学生、それに日本人（RA）が参加している。作品について各自説明し合うことにしているが、講師も驚くほど上達している受講者が出ている。

空手は、アフリカ出身でHIHのOBが毎回参加し、講師の指揮下、積極的に後輩の指導に当たっている。常連が多い中、今回久しぶりに女子学生が参加し華やいだ雰囲気になっている。空手は初めてとのことだったが、日本語を理解できるので空手の神髄に触れたとのこと。

書道教室は、従来は熱心なタイの受講生と中国からの学生数人の少数精鋭だったが、このところ非漢字圏のアフリカ、中東、欧米からの学生が興味を示し、直近では9人と過去最高を記録している。彼らは、日本語広場では漢字に苦労しているが、書道で漢字に興味を持ってもらえればと願っている。

ところで、ABICのもう一つの留学生支援活動である新入生歓迎バザーについて2021年度は中止していたが、2022年度は5月に実施し、12月にも実施の予定である。

（関西デスクコーディネーター）



日本語広場

華道教室

書道教室

その他

全国中学生作文コンテスト東京都大会の一次審査を担当

ABICは、日本国際連合協会東京都本部からの委託事業として、「国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト東京都大会」の一次審査を担当した。

同大会は外務省と公益財団法人日本国際連合協会が主催する「国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト」の東京都大会に当たり、2022年が62回目となる。同大会では、毎回、課題（テーマ）が決められており、2022年の課題は、①持続可能な開発目標（SDGs）の中で一つ目標を選ぶとしたら、どのような理由でどの目標を選ぶか。また、その目標をどのように達成するか。②今の国連に何が求められているのか。③争いや差別のない世界にするために国連と私たちができること。の三つであった。その中から一つを選び、400字詰め原稿用紙約4枚に自分の意見をまとめるものであった。

審査にあたり、SDGsについて審査員が内容を勉強、確認しておく必要があるだろうということで、日本貿易会の協力を得て、事前にオンラインでSDGsの勉強会を開催した。9月6日から4日間、ABIC会員8人を含む計17人で一次審査を行った。審査では、応募数が予想より多かったため、他の作品との比較に苦労していた。また、審査基準はあったものの、一作品を複数の審査員で担当したため、作品によっては評価が分かれたものがあった。日本国際連合協会東京都本部による二次審査を経て、東京都大会の入賞者が決定した。その中で特賞に選ばれた2作品が全国大会に推薦された。本大会には東京都を含め全国から3,381作品の応募があり、予選を通過した45作品の中から18作品が入賞した。そのうちの一つは東京都本部が推薦した作品であった。（金賞受賞）

審査会の様子

審査を担当したABIC会員は、中学生が課題について真摯に受け止め、しっかりした自分の意見を述べている作品が多かったと、驚くとともに高く評価していた。また、自らの体験が本件への関心、応募につながったとしている中学生もいて、この年代での実体験の重要性を改めて感じるとともに、自らの体験を思い起こしたという会員もいた。

本委託事業を紹介してくれた一般財団法人東京都つながり創生財団は、同財団からの以下の寄稿にもあるように、地域コミュニティーの活性化を支援しており、今後、ABICとのコラボ事業の展開を期待している。

（小中高校国際理解教育グループ）

東京都つながり創生財団について

一般財団法人東京都つながり創生財団
多文化共生課　江坂　静子

東京都つながり創生財団は、東京の活力の源泉である「人」と「人」をつなぎ、地域コミュニティーの活性化を支援する団体として2020年10月に東京都により設立されました。都民一人一人が輝く社会の実現を目指し、「多文化共生社会づくり」と「共助社会づくり」を推進しています。

「多文化共生社会づくり」では、15言語で電話相談を行う「東京都多言語相談ナビ（TMC Navi）」の他、東京都で暮らす外国人とその支援者、広く多文化共生に興味を持つ人などが情報を一元的に取得できる「東京都多文化共生ポータルサイト」や、地域のボランティアによる日本語教室を検索できる「東京日本語教室サイト」を運営、また、地域で多文化共生に関する課題を解決する人材の育成を目指した「多文化共生コーディネーター研修」などを実施しています。

「共助社会づくり」では、ボランティア活動に関心のある人と受け入れ団体の双方に有益な情報を収集・提供するウェブサイト「東京ボランティアレガシーネットワーク」の運営や、弊財団と区市町村等からなる支援チームが、個別に町会・自治会の相談に乗りながら、事業の企画提案から実施までをトータルで伴走支援する「町会・自治会応援キャラバン」事業などを行っています。

2022年10月で設立から2年がたった弊財団は、まだまだ十分な活動ができているとはいえませんが、今後も地域の活性化に向けて尽力して参りたいと思います。ぜひ、長年にわたり世界でご活躍されてきたABIC会員の皆さまのお力もお貸しいただけますと幸いです。

ウェブサイト　https://www.tokyo-tsunagari.or.jp

会員の種類

種類	内容	年会費		
正 会 員	センターの趣旨に賛同し、活動を推進し、会費を納める個人、法人および団体。（理事会の承認を得て入会）	法人および団体	1口	50,000円
		個人	1口	10,000円
賛助会員	センターの趣旨に賛同し、会費を納める活動会員、ならびに個人、法人および団体。	法人および団体	1口	10,000円
		個人	1口	5,000円
活動会員	センターの趣旨に賛同し、事業に参加しようとする個人。	不要	—	—

（2022年10月末現在）

正　会　員

法人・団体（16社、1団体）〈社名五十音順〉

〈10口〉 伊藤忠商事㈱　住友商事㈱　双日㈱　豊田通商㈱　丸紅㈱　三井物産㈱　三菱商事㈱　(一社)日本貿易会

〈2口〉 稲畑産業㈱　岩谷産業㈱　長瀬産業㈱　日鉄物産㈱　阪和興業㈱

〈1口〉 兼松㈱　興和㈱　JFE商事㈱　蝶理㈱

個人（13名）〈敬称略・氏名五十音順〉

〈3口〉 槍田松瑩　中村邦晴

〈1口〉 池上久雄　市村泰男　岩城宏斗司　岡　素之　小林栄三　小林　健　齊藤秀久　佐々木幹夫　寺島実郎　宮原賢次　吉田靖男

賛 助 会 員

法人・団体（3社）〈社名五十音順〉

〈1口〉 ㈲イーコマース研究所　㈱エックス・エヌ　三谷ビジネスパートナーズ㈱

個人（216名）〈敬称略・氏名五十音順〉

下記は2022年6月以降にお申し込みいただいた方です。ご協力に深謝申し上げます。

〈1口〉 朝倉一美　紙屋　司　葛目　薫　瀧本　忠　冨永宏志　西村信泰　三浦純一　山崎義則

活 動 会 員　2,989名

賛助会員入会のお願い

ABICの活動にご賛同いただき、資金的な援助をしていただける活動会員およびその他の個人の方、ならびに法人および団体の皆さまのご入会をお願い申し上げます。

会員入会のお問い合わせ・連絡先
特定非営利活動法人 国際社会貢献センター（ABIC）
〒100－0013 東京都千代田区霞が関3－2－1　霞が関コモンゲート西館20階
TEL：03－6268－8604　FAX：03－6268－8652　E-mail：mail@abic.or.jp